

関西教育学会第68回
発表資料

「クラシック音楽の演奏に関する ルーブリックの作成」

2016年12月3日(土)11:30~12:00
立命館大学 衣笠キャンパス

杉原 亨

関東学院大学 高等教育研究・開発センター 専任講師

ルーブリックの定義

- 学習者のパフォーマンスの質を評価するために用いられる評価基準のことである。（松下,2016）
- ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事例を配置するための道具。（スティーブンス & レビ,2014）

ルーブリックの4要素

- 課題・・・課題内容
- 観点(学修規準)・・・課題に必要なスキル
- 尺度(基準)・・・評価のレベル(3から5分法)
- 評価基準・・・観点と尺度により規定される内容

研究背景

- 近年、教育現場では学習成果（アウトカムズ）の可視化による教育の質保証が求められており、その1つの方法としてルーブリックの導入・推進が検討されている。
- 本研究では、芸術分野に着目し、その中でクラシック音楽の演奏評価についてルーブリックを作成し、実証を行った。

研究概要

<研究①>

クラシック音楽の演奏に関するループリックの作成

<研究②>

作成したループリックによる、「指導者による演奏評価」と「生徒自身の自己評価」の差分についての検証

研究①ルーブリック作成

- 2016年7月から8月にかけて、筆者とクラシック音楽講師歴20年の指導者と共同して作成した。
- 筆者はルーブリックについての概念や枠組みを音楽指導者に共有した上で、指導者が詳細項目を検討し、最終的に共同でルーブリックを完成させた。

ルースブリックの観点・尺度①

< 観点 >

□ 楽譜の読解力

- ①音名が読める・②リズムを取ることができる・③音楽用語を理解できる・④音程が頭の中で再現できる・⑤楽譜を演奏するために必要な技術を適切に思考できる・⑥課題曲についての知識を持っている

□ 楽譜を再現する演奏(技術)力

- ①音名を正しく演奏できる・②リズムを取ることができる・③音楽用語を理解でき演奏できる・④音程が頭の中で再現したものと一致した演奏ができる・⑤楽譜を演奏するために必要な技術を適切に実行できる・⑥課題曲についての知識を演奏に反映できる

ルーブリックの観点・尺度②

< 観点 >

- 演奏の表現力及び個性

< 尺度 >

- 3段階評価(素晴らしい・普通・努力が必要)

クラシック演奏に関するルーブリック(VER1.0)

	A:素晴らしい	B:普通	C:努力が必要
楽譜の読解力	<p><u>・楽譜をかなり理解できている</u> (1,音名が読める・2,リズムを取ることができる・3,音楽用語を理解できる・4,音程が頭の中で再現できる・5,楽譜を演奏するために必要な技術を適切に思考できる・6,課題曲に関しての知識を持っている)</p>	<p>・いくつかの理解できていないところもあるが、概ね楽譜を理解できている</p>	<p>・楽譜を理解できていない</p>
楽譜を再現する演奏(技術)力	<p><u>・読解した内容すべてを演奏で再現できる</u> <u>・持っている知識を実際に使える</u> (1,音名を正しく演奏できる・2,リズムを取ることができる・3,音楽用語を理解でき演奏できる・4,音程が頭の中で再現したものと一致した演奏ができる・5,楽譜を演奏するために必要な技術を適切に実行できる・6,課題曲に関しての知識を演奏に反映できる)</p>	<p>・いくつかのミスはあるが概ね譜面通り演奏できる</p>	<p>・譜面通り演奏できていない(技術不足)</p>
演奏の表現力及び個性	<p><u>・読解した内容以上のことを楽譜から想像し、演奏できる</u> (たとえば、歌詞が悲しい内容だったらそのような音を出した、など)</p>	<p>・想像できる箇所とできない箇所が混在している。</p>	<p>・書かれていること以外はまったく想像できない</p>

研究②ルーブリックの検証(概要)

- **調査目的**: 「指導者による演奏評価」と「生徒自身の自己評価」の差分の検証。
- **調査時期**: 2016年8月
- **評価者**: 音楽講師歴20年(専門はヴィオラ)
- **被験者**: 高校2年生男子2名。ヴィオラ歴9年
- **調査方法**: 教材は、ドボルザーク作曲・交響曲第9番「新世界より」(2楽章の最後部分より抜粋)。生徒による演奏を、指導者と生徒それぞれでルーブリックで評価し、その結果を分析した。

検証結果

- 演奏の表現力・個性は、指導者の評価が高かった。
- 楽譜の読解力より演奏力の評価が低い。

	生徒A			生徒B		
	指導者の評価	自己評価	差分	指導者の評価	自己評価	差分
楽譜の読解力	B	B+	自己評価が高い	A-	B	指導者の評価が高い
楽譜を再現する演奏 (技術)力	B-	B	自己評価が高い	B	B-	指導者の評価が高い
演奏の表現力及び 個性	B+	C+	指導者の評価が高い	A-	B+	指導者の評価が高い

指導者と生徒によるディスカッション

□ルーブリックによる検証の後、指導者と生徒によるディスカッションを行った。以下は指導者の所感。

<楽譜の読解力>

- 楽器歴がそれなりにあるため、楽譜を読む力は2人とも十分に高いものであったが、曲に関する知識が非常に低いことが判明した。クラシック音楽の場合、楽譜を単に読めるだけではなく、作曲者の生涯や曲が書かれた歴史的背景などを理解しているかも評価対象のため、音楽以外の知識も要求される。その知識は圧倒的に低いことがわかった。

<楽譜を再現する演奏(技術)力>

- 指導者から見ると、楽器を演奏することはもともと難しい作業のため、技術に関しては採点は甘めになりがちである。しかし評価される側は、楽譜を理解できる能力は高く頭では理解できていても、実際には頭で理解し想像した演奏からはほど遠い演奏(アウトプット)しかできないため、採点者より自己評価が低くでる傾向があるのではないか？
- また、楽譜が読めて理解できていても、実際に演奏するまで自分が知っている曲だと判断が2人ともできなかった。耳の記憶と楽譜の記憶が一致するのは難しいことがわかった。

＜演奏の表現力及び個性＞

- 1回目の演奏で曲の知識が思い出されたため、曲に対するイメージが膨らみ、なつかしい感じや、物悲しい感じなど、表現の幅が出てきたため2回目は1回目よりも優れた演奏を2人ともすることができた。しかし、演奏記号(例・フェルマータ)を、意味は理解できるものの曲にあわせて自分で演奏に反映するためにカスタマイズすることは難しく、やはり原曲に対する知識が不足しているという結果になった。

<総括>

- 頭でのイメージはあるが、実際の演奏に反映させるのは非常に難しいことがわかった。そのため、採点者よりも評価対象者のほうが自己の評価を下げて、評価を低く見積もってしまう可能性を感じた(今回は自己評価が高い項目もあったが・・)。人前で何かを披露することを避けるようになってしまうのでは?という疑念がわいた。
- また、譜読み以外の曲に対する(背景)への知識が、演奏に大きな影響を及ぼすことがわかった。

研究の課題と今後

- ルーブリックの作成に関しては、まだ改良の余地もあり、詳細項目を整理したものを完成させていきたい。
- 検証については、2人という萌芽的事例であり、継続的な調査実施を行うのと同時に、指導法（教育）への示唆が可能になるよう検討を進めていきたい。

文献

- 杉森公一,2016,深い学びを促す授業設計と学修評価,関東学院大学人間環境学会研究研修会資料(講演資料)
- 松下佳代・石井英真,2016,アクティブラーニングの評価,東信堂
- ダネル・スティーブンス,アントニア・レビ著・佐藤浩章監訳・井上敏憲,俣野秀典訳,2014,高等教育シリーズ163 大学教員のためのルーブリック評価入門,玉川大学出版部

ご清聴ありがとうございました。

ご質問など:

杉原亨

関東学院大学 高等教育研究・開発センター

sugihara@kanto-gakuin.ac.jp